

2023年9月7～12日の6日間、NPO法人河北潟湖沼研究所にてインターンという形で活動に参加いたしました。インターンに応募した動機としては、私が里山再生や環境教育といった、人と自然をつなげるような活動に非常に興味があったからです。本研究所は設立から約30年もの長い歴史を誇っており、地域の人々を巻き込んだ環境保全活動に積極的に取り組んでいます。大学でのボランティア活動での経験から環境の整備や保全に人々を巻き込むのは簡単なことではないことを知っていたので、どのようにして活動の主体を増やしていったのか、また具体的にどのような事業に取り組んでいるのかを学びたいと思い、石川県にやってきました。

インターン初日は、まず河北潟流域新聞の配達作業を行いました。研究所のスタッフである番匠さんと協力し、それぞれ100部ずつ携えて一軒一軒に配っていきました。今回私が配った新聞を読んでくださった町民の方々が、河北潟の自然環境に興味をもったり湖沼研究所の活動に関わってくださったたりしたら、非常に喜ばしく思います。

次に、湖沼研究所の理事長である高橋さんと、スタッフの川原さんに同行し、河北潟に流入する承水路沿いの道で植物の調査をおこないました。河北潟の周辺に生えている植物は、私が普段広島で見るとは違った種類のものが多く、川原さんに色々質問して興味も広がりました。特に印象に残っているのはヤハズソウという植物で、マメ科の小さな植物なのですが、葉っぱをつまんで引っ張ってみると、葉っぱが葉脈に沿って裂け、あたかも矢筈（矢のおしり）のような形になったのでした。また、私自身は昆虫に興味があるので、調査中にクワの葉っぱの上に見つけたクワコというガの幼虫（カイコによく似ている）を解説して、皆さんに喜んでいただけました。その後、私が宿泊させてもらうことになった古民家をご案内いただきました。古民家は河北潟流域にある津幡町吉倉に位置しており、吉倉での活動拠点やイ



砂丘地畑での除草作業

ンターン生の受け入れのために使用されているそうです。

2日目は、朝から「すずめ野菜」の収穫作業でした。すずめ野菜は内灘砂丘という砂丘地で栽培されています。今回は、除草・水やり・収穫・播種の一連の作業を体験させていただきました。除草では、刈り取られた雑草を一輪車に積み、畑の隅に積んでいく作業がメインでなかなか体力を要しましたが、除草中に多くの砂丘ならではの生き物を見つけることができるのもあって、それが楽しくて全く苦にはなりません。収穫は、ピーマンとモロヘイヤの2種を担当しました。サイズが小さいのですずめ野菜ということでしたが、今回収穫したものは株立ちが立派で、野菜自体も色艶・大きさともに優れており、とてもおいしそうに感じました。白菜とカブの種蒔きをしました。

この日はそのまま、マルシェで販売するために、収穫したすずめ野菜の梱包作業を吉倉の宿で行いました。袋詰めにされた野菜がスーパーや市場で売られているのは、私含め多くの人が常日頃から目にすると思います。しかし、梱包する過程を見る、または経験したことのある人はほとんどいないのではないのでしょうか。実は、袋を縛るテープも、値札シールも、専用の道具を使用して貼付しているのです。特に仕組みが面白いと思ったのは値札シールを作る道具でした。梱包した野菜を車に積み、マルシェの会場である金沢駅に向かいました。現地に着くとすでにお客さんが2,3

人いてマルシェの設営をお手伝いしてくださいました。設営が完了すると続々とお客さんが集い、野菜を購入してくださいました。どの方も楽しそうに野菜を手にとってくださり、「いつも美味しい野菜をありがとう」とお声がけいただくこともありました。自らの手で摘み取り、梱包した野菜が目の前で多くの方に買われていくことにとても感慨深さとやりがいを感じました。



金沢駅西広場での「ゆうぐれ金曜マルシェ」

3日目は、干拓地で外来植物および野鳥の調査を行いました。初日とは違い、今回は車窓から見えるものを記録するという形での調査で、川原さんが外来植物を、私が野鳥を目視で探し、記録しました。干拓地の広い農地には多くの外来植物が侵入しており、特に多かったものはオオオナモミ、ヒロハフウリンホオズキ、イチビでした。この中で、オオオナモミとヒロハフウリンホオズキは私の地元である兵庫県の休耕地でよく見かけられますが、イチビは河北潟に来て初めて見た外来植物でした。野鳥は今回キジやトビといった平野部の身近な種が多く見つかりましたが、チュウヒという猛禽類（湖沼研究所のアイコンになっている鳥）がいることもあるそうです。

その日の晩には、吉倉の家で懇親会があり、私は河北潟セミナーの講師として広島県での活動の事例について発表し、多様なバックグラウンドの方々にご清聴いただきました。主な発表内容は私が広島県で取り組んでいる地域資源の活用事例でした。それぞれの視点から率直なご意見・ご感想をいただき、自分の考え方がアップデートされる刺激的なセミナーになりました。その後は夕食を囲みながら参加者と情報の交換や今後の河北潟で

の事業の展開について語り合いました。

4日目は、吉倉集落にて、地域資源を発見するための「吉倉探検隊」を行いました。参加者には湖沼研究所のスタッフを含む9人が集まりました。まず、宿を出てすぐの集落の道を通って行きました。途中の橋の上から水路を覗くと、水中を泳ぐアブラハヤの群れや水面に漂う草にとまるハグロトンボなどが見えました。それから丘陵を上る細い道に入りました。森に隣接した小道で、集落を通る道とは打って変わって薄暗い環境でした。頭上をモンキアゲハやカラスアゲハといった大型のチョウが飛び交い、枝葉にはオニヤンマやオオカマキリの姿がありました。途中土砂崩れによって道が塞がれていました。8月に石川県を襲った線状降水帯がもたらした被害とのことです。右端は人が一人通れるくらいの隙間があり、通り抜けることができました。くぐり抜けた先には、広い草むらが広がっていました。この草むらはかつて水田だったものですが、耕作放棄により荒れた結果だそうです。草むらにはバッタが多く、一番よく見られたのがクルマバッタという大型のバッタで、動きが速いので捕まえがいがあり、子どもたちも夢中でバッタを追いかけていました。草むらからさらに進むと、最奥にため池がありました。現在は利用されていない池ですが、水面にヒシという水生植物の葉が茂っており、30分間ほど網を入れてみた結果、マツモムシやメダカ、ヒメゲンゴロウといった水生生物がたくさん捕獲されました。これには子どもたちも大喜びで、達成感がありました。吉倉地区の自然には体験活動の場としての大きなポテンシャルを秘めており、人の手を加え



古民家での河北潟セミナー





ヒシがたくさん生える溜め池で生きものの探し

る、つまり里山再生を行うことによってさらにフィールドの価値が高まりそうだと感じました。

5日目は、午後から河北潟自然再生まつりの実行委員会に参加しました。委員会には河北潟湖沼研究所のスタッフだけでなく、河北潟干拓土地改良区の方や農事組合法人の方など多様な所属の方々が参加されていました。そのため、考え方の違いにより意見が分かれることもありましたが、終始和やかな雰囲気での会議だったのが印象的でした。実行委員会のメンバーは昔ながらの付き合いで、信頼関係が築かれているとのこと。また、多様なバックグラウンドをもつ方々が寄り集まって企画を行うことで、多彩かつ規模の大きいイベントができるのだと感じました。

委員会が終わった後は、そのまま高橋さんと川原さんに河北潟周辺をご案内いただきながら、河北潟に関する歴史と現在、今後向き合わなければならない課題についてお話を聞きました。河北潟の干拓地は人為的に排水されることによって維持されていて、その維持費は毎年（？）数億円にもなります。しかしその一方で干拓地での農業の衰退や河北潟のゴミの漂流・生物多様性の低下といった問題が起こっています。さらには、河北潟流域の住民との、河北潟や干拓地との関わりも薄れつつあるとのこと。住民と河北潟がかつての関わりを取り戻し、河北潟が住民にとって広い意味での豊かさをもたらすものになることを目指さなくては、と一個人として感じました。

6日目は、稲架掛けをしておいた稲を脱穀する作業を午前中に行う予定だったのですが、米の水分量が高かったので断念し、河北潟環境対策期成同



砂丘上から河北潟放水路、干拓地、潟を望む

盟会主催の「河北潟見学ツアー」に途中参加しました。同行した川原さんの「河北潟クリーン作戦」の活動紹介を聞き、長年にわたり行われている河北潟クリーン作戦が、多くの人々を巻き込んでいった経緯を詳しく知ることができました。近年は作戦エリアも拡充し、カヌーやSUPを活用した水上のゴミ拾いも行われるようになったようで、水上スポーツとゴミ拾いを組み合わせるのは素晴らしいアイデアだと思いました。

以上が、私が河北潟湖沼研究所で体験させていただいた活動になります。今回のインターンシップを通して感じたことは、研究所は新しい事業に次々と取り組まれている一方で、長きにわたり継続的に取り組んでいる事業もとても多いということです。ここ数年はコロナ禍の影響で全国的に途絶えてしまった事業やイベントが多い中、そういった多くの逆境を乗り越えて活動を維持していることに衝撃を覚えました。さらに、河北潟クリーン作戦や野外調査など、活動の中で得られる数値データを蓄積し、積極的に論文を投稿していることにも驚嘆しました。環境保全を行うNPOは数多しといえど、論文投稿による社会貢献を果たしているものはそう多くないのではないかと思います。多面的な活動の堅実な積み重ねと新しい事業にも意欲的な姿勢が信頼を勝ち取り、現在多くの仲間やサポーターを獲得しているのだと思いました。

今回、実に多くのことを河北潟湖沼研究所から学ぶことができました。改めまして、お世話になりました高橋久理事長、スタッフの川原さん・番匠さん、その他多くの関係者に厚く御礼申し上げます。